文書、豐前の求菩提山文書、黒水文書等の中より重要なるものを撰んで各文書別に載せられてゐる。近世の記錄は主として藩治に關する記錄で、編者も、古代より近代に重きを置くと述べてゐる如く、福岡藩、秋月藩、久留米藩、柳河藩、三池藩、小倉藩等に關する記錄がかなり豐富に載せられてあり、藩治時代の鄉土史研究上には多くの資料を提供してゐる。最後の明治史料の項は、明治初年の福岡縣に關する資料を集めたもので、明治初年の變革期に於ける福岡縣の情勢を窺ふに足るものがある。

尙、各册の卷頭には、重要なる文書、寫經等の寫眞版が載せられ、卷尾には、古圖の寫眞版が附載されてゐる。

編纂の方法に多少の混雜があるとは言へ、全十册に亙つて、福岡縣史に關する資料を多方面に亙りかくも豐富に集成された編者の勞苦に對して衷心の敬意を表しなければならない。この書成つて福岡縣鄉土史、更には一般日本歷史研究上に裨益する所、また少なからざるものがあらう。(全十册、每册約八〇〇頁、菊版、福岡縣發行)〔水野恭一郎〕

日向古文書集成

宮崎縣編

近年社會經濟史の研究が進むと共に、史料に對する關心は益々精細になつて來た。けれども史料を披閱することは、種々な事情からして、一般の研究者にとつては必しも容易なことではない。今こゝに日向古文書集成と題して、宮崎縣關係の古文書を集大成して、一般に公にせられたことは、貴重な史料の披閱を容易ならしめ、學界を益すること大なるものがあることを思ひ、喜びに堪へない次第である。

本書に收められた古文書は、大別して三つに分類されて居る。第一類は、縣內に現存する古文書を收め、第二類は、薩藩舊記・日向記の舊記類に收むる古文書を採擇し、第三類は、縣外に遺存する古文書の中より宮崎縣關係のものを摘收して居る。今各類に收められて居る文書を擧ければ次の如くである。

第一類

大光寺文書、富山文書、土持文書、島津伯爵家所藏文書、町田文書、金剛寺文書、秋月文書、田尻文書、霧島神宮文書、樺山文書、掃部文書、伊東文書、垂水氏舊藏伊東文書、長谷場文書、比志島文書、行縢神社文書、島津男爵家所藏文書、霧島神社文書、伊勢文書、養門寺文書

第二類

新編薩藩氏世錄正統系圖所收文書、入田系圖所收文書、薩藩舊記所收文書、日向記所收伊東文書

第三類

伊賀國古文書、東寺文書、政所惣檢校益永家職掌證文寫并諸事、宇佐八幡大神宮御造營中古證類、前田侯爵家所藏文書、丹後安國寺文書、志賀文書、天龍寺造營記錄、妙本寺文書、後藤家古文書、大友文書、五條文書、阿蘇文書、相良文書、島津公爵家所藏文書、島津公爵家所藏樺山文書、色川本島津文書、北鄉文

書、中村文書、野邊文書、鬼東文書、山田文書

以上擧示したところによつて、大體その蒐集の範圍が知られることゝ思ふ。而かも編者は、猶遺漏のあることを恐れて增補の事も考慮して居られる樣である。

さて全卷の體裁は、大體に於て大日本古文書の體裁を踏襲し、篇頭に文書の要旨又は文書中に見える重要な人名・地名・用語を標出し、又年紀・人名を考證して傍書するなど、凡て大日本古文書と同一である。加ふるに卷末に全卷を通じての編年目次を附し文書の檢索の便に供してあるのは、これ又讀者を利すること大なるものがある。

元來九州の土地制度には、何か個有なものが存したらしく思はれる。口分田制度の施行に當つて、大隅薩摩の隼人の國に於ては土地割換の舊慣が無かつた爲め、その施行がおくれたことがある。又平安朝の初期に於ける公營田も、先づ最初は九州に於て施行され、而も公營田の耕作方法は、民間の耕作方法を採用したものであつた。これ等のことから見れば、九州の土地制度には何か個有のものが存したらしく思はれる。そして庄園制度の盛行の時代に至つても、猶九州が個有のものが存したであらうことは、例へば島津庄などが近畿地方に於て見ることが出來ない大きな規模を持つて居たことなどから考へられる。これらの問題は近時漸く注意されるに至つた問題で、その糺明は今後に待つものが多い。かゝる時期に當つて、本書並びに福岡縣史資料など、九州地方關係の古文書の刊行を見ることは誠に有意義なことゝ思はれる。

最後に、本書に收められて居る各々の文書の所藏者に就いて、簡單な紹介があれば、本書を利用せんとするものを更らに裨益するところがあつたであらうことを、一言申添へさしていたゞき度い。（菊版、七一八頁、昭和十三年六月、宮崎縣發行）（田井啓吾）

概說支那佛教史

道端良秀著

著者道端氏は支那佛教史、特に教團の社會經濟史的方面の研究家として既に數々の論考をものされてゐたが、今度、大谷大學における講義案を基礎とし、一には教科書用として、兼ねては興亞文化工作における佛教の役割の重大を感じ、この方面の要望に沿ふため本書を刊行された。從來所謂支那佛教史の概說書はその數乏しとしないのである、唯それらの內容に至つては、譯經・注解高僧の傳記や師承關係の記述を、中心とするといふよりは殆んどそれのみに占められ、一方上記の教理史に重きをおいたのに關聯してか六朝隋唐に詳しく、近世支那の佛教については簡單なるか、或ひは全く缺いてゐるものもある。これに反し、本書は冒頭に著者が「佛教史とは何か」と問題を提出せられ、佛教史とは佛法僧三寶に關する一切の事象を歷史的に究むる學であり、教會史（教團史）と教理史（教學史）とに大別され、後者は法そのものの發展系統を中心として述べるもので、各宗教理の展開の歷史であり、教團史に教理以外の一切のもの、美術・文學・法制・經濟・寺院史・僧傳等あらゆる方面を抱擁するものである。然しこの兩者は相互